

# 水の都「広島」の川筋

広島城下町の形成に際し、太田川の下流部には大小の砂洲が発達していた。本流の本川は白鳥地区北端の一本木島から「二保川」となり東方に京橋川が分岐し、南流し寺地区北端の北ノ鼻東方に天満川が分岐します。さらに中島地区北端の慈仙寺の鼻で東方に元山川が分岐し、江波地区にて江波湾に至っています。支流の京橋川は古代以来の安芸・佐伯郡界として本流とて存在し、中世末期に西は佐東郡五ヶ村と呼ばれ、箱島・在間・鍛冶塚・平塚と本川の広瀬を領域としていました。在間の地が広島城の大手堀にあたり、北の箱島(後の白島)や鍛冶塚・平塚を併せ、城下の縄張りが形成されました。

初期城下の毛利陣屋は「鳥居跡」と呼ばれる城下建設と町割り、出雲国より平田屋敷右衛門を招き完成されました。二代城主の福島正則は西国街道を現在の本流に移し、広瀬川の増幅で出雲石見街道を分岐させ、寺町に横川橋が架けられ北流との交通が行われました。本川と京橋川の間は、白神組・中道組・新町組になり、境界は新たに開闢された白鳥地区(西川川よりも)と平田屋川となりました。本川と元山川に挟まれた地区は中島組に、本川西岸一帯は広瀬組となりました。本川および京橋川の下流部には、江戸初期より開闢開始の(開発)が行われ、城下を取り囲み新開地の村々が誕生しました。やがて江波地区や仁保地区にも新開地は広がり、名産ともないうちには「水の都」となっていた。



広島城下でも寺町組や新開地と、区画に対応するための非常食糧確保のため「社会屋」の設置がなされ、本組は新開地の中心。 (『新編広島市史』巻3第150頁)

# 城下南部の発展誌

歴史年表	
応安4年 1371	今川直経、しほの浜を通り、海田をたむけ西の道に遷る。
明応4年 1495	武田元信、白井光直に仁保島海上砦を築く。
弘治元年 1555	毛利輝元、総高倉砦で海軍を攻撃。
天正4年 1576	毛利水軍、藤原郡の包囲を破り、石山本願寺に兵糧米輸送。
天正17年 1589	毛利輝元、広島城築城の発願を行い、城下建設を開始。平田屋敷右衛門は平田屋川を開闢する。
天正19年 1591	輝元は112万石余を領し、広島城に入城する。
文禄3年 1594	安国寺普庵は新安国寺、輝元は白神社殿を建立。西山川が開闢される。
慶長5年 1600	關ヶ原の合戦。毛利氏は萩城下に滅亡、福島正則が尾道城より入城する。
元和元年 1615	大洪水が起き正則は建陽院を築き、八剣神社を建立。
元和5年 1619	福島正則は幕府を改易。
元和6年 1620	長瀬上田原間に城郭築造の要を命じ、津川を開闢する。幕府の命で東田原砦を整備。
寛永10年 1633	広島藩は、広島刑法監、郡中法監、津波度々を制定。
元禄12年 1699	広島市の口分所(市川口番所)を設け、
享保18年 1733	新長衆のため、広島建屋の町をさらせを行う。この清水主軸に住吉神社勧進され、住吉町が開る。
宝暦元年 1757	新開町および新開方木跡政所を設ける。
安永年間 1854-60	城下の船橋が新戸内海的主要進出に定期船を開航。
文久2年 1862	本川川上及砂州加勢が行われ賑わいを見せる。
慶応3年 1867	大枝春造
明治4年 1871	廣瀬源三
昭和20年 1945	広島空襲被害

**雁木**  
雁木は、船着場として使われていた運岸の階段で、潮の満ち引きなどによる水面の変化に関係なく、船を接岸できるように工夫されたものである。  
城下には多くの雁木が設けられ、太田川上流や瀬戸内海の島々から多くの船が乗り、様々な物資や商賈が流れ込み賑わいをみせていた。

# 新開地の開発史

城下周辺の開発史			
新聞地名等	築開年代	地誌年代	面積(㎡)
国奉寺村	寛永11(1634)	元禄14(1701)	44.9
大須新町	万治3(1660)	元禄12(1699)	41.2
矢賀村	万治3(1660)	元禄年間	54.4
古川村	天和3(1683)	正徳3(1713)	19.0
尾長村		天和3(1683)	33.6
比治所		正徳3(1713)	20.7
仁保長東新聞	寛文2(1662)	元禄12(1699)	123.5
仁保長西新聞	寛文2(1662)	元禄12(1699)	144.1
江波新聞		元禄14(1701)	45.4
竹屋村		元禄3(1713)	35.5
入道新聞	延宝7(1679)	元禄14(1701)	46.7
大須新聞		享保10(1725)	46.7
大須南村		正徳3(1713)	26.4
大須北村		正徳3(1713)	43.7

【加東】地区に開闢は早くからと、江戸時代前半、特に17世紀は「開発の世紀」とも言われ、新田開発が積極的に推進された。戦国時代以来の土木技術の進歩により、大河川の治水水利・灌漑用水施設・干潟干拓事業が可能になり、諸大名は領国経営の充実策を図り、広島藩も17世紀に大規模な新開事業を推進した。民衆のとも相まって、新開高と改出高の合計は、正徳元年(1711)までに55,000石余にも達した。

新田開発の中心は安芸・沼田・佐伯・賀茂の諸郡の沿岸部で、広島城下でも太田川河口部の干潟を対象に干拓事業が継続され、享保20年(1735)までの地誌(検地)の状況は付表のとおりでした。江戸後期には水主町御普請開、江波九子新聞、観音沖新聞などが開かれ、町人や農民による小規模な新田開発が見られ、明和4年(1767)の江波島北洲に新聞築造が許可されました。享保以降の新開地には、水主町御普請開(文化6年(1809)地誌)・江波九子新聞(文化9年(1812)築調)・観音沖新聞(文化9年(1818)築調)などが開かれました。因みに「芸藩通志」に新聞開全体では、見そ田は965町9反4歩で、歳額は11,389石8斗8升6合9勺が記載され、城下の経済を背後から支えていました。

その後、明治3年(1870)の庚午新聞(現西區)に受け継がれ、長大な新開地が広島城下を取り囲んでいたので。

# 城下南部の史跡

**西堂橋跡**  
西堂川に架かっていた橋で、白神社西南にあたり西馬橋といわれ、「新築集」に安国寺興隆が国奉寺門として建てた屋形軒の奇橋で、「芸藩通志」には「東福町の遠天地の別」と記載されています。白神社の旧瓦道間は徳川幕府の工や石工等が移住し、城下町の景観に果たしたといわれています。

**切支丹新聞**  
福島正則の保護の下、切支丹教会はこの新聞に教員を専らしてハンセー病院を設けました。新聞は教会新聞もあり外国人宣教師の技術が導入され、後の新聞開発の礎となりました。

**水主町**  
本川や元山川の水道を重視され、藩船や軍船として常備された船が集結し、船頭や水主多人数いたことが5町名となりました。浦町の船屋船方役所が設けられ、船入には藩船が保管され、新造や修理に当たる船作寮所や、船政などが建て並んでいました。明治11年(1878)に広島銀行が水主町屋敷を開行し、広島病院や広島市役所や日本銀行広島支店等が建てられました。

**萬象園跡 興樂園跡 萬春園跡 春和園跡**  
三原浅野家下屋敷は明暦年中(1655-58)に、2代藩主光隆により萬象園が築かれ、泉水屋敷(徳松園)に次ぐ名園とされた。浅野家主町屋敷には享和元年(1801)に興樂園が7代藩主重直により着手され、享和9年(1826)に竣工されました。舟入地区の豪家上田氏下屋敷は、萬春園が葎か山水軒が建てられました。国奉寺地区の年寄守中氏下屋敷には、別荘春和園が造営されました。後に稱清水や精山園や山名義方により広島市景勝とされた。

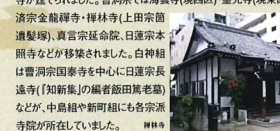
**江波三山**  
古は「長門島」と記され、広島湾の孤島として存在し、「名原島」とも稱し、多くの魚が獲れる地として「魚場」と呼ばれました。また「石切島」とも稱し石切場があり、江戸後期には江波地が生れ、「山」と呼ばれていました。「安芸国名帳」(鎌倉時代末期)には「衣羽明神」(現衣羽神社)の名が載り、蔵島の御祭神が勧進されました。現在の地名は「江波」・「丸」の二山が並び、衣羽神社・海寶寺・丸山不動尊が所在します。

# 城下南部の社寺

**住吉神社**  
中島地区南端の弥生時代から位置し、本川筋の舟運の守護神として、享保年間(1735)に一宮・住吉大社の御分宮を祀り、毎年旧暦6月15-16日には「住吉祭」が「広島大祭り」のひとつで、現在も賑わいを見せています。

**比治山神社**  
城下東部の比治山下に位置し、文政3年(1820)に勧進され、南丘が現在の貴倉橋に移り、祭神は貴倉神と言われ、京浦川沿いの産土社となりました。

**東寺町**  
浄土真宗白旗別院を中心とした西寺町に対し、平田屋川沿いの新川堤町一帯には、浄土真宗以外の寺院が軒を並べています。福島正則が舟の菩提寺の浄土宗浄願寺を慶長5年(1600)に尾島から移し、正清院(現西區)・戒善寺・清願寺が建てられました。曹洞宗で海雲寺(現西區)・聖光寺(現東區)・清宗金輪禪寺・禪林寺(上田宗簡遺製廟)、真言宗徒命院、日蓮宗本照寺などが移築されました。白神組は曹洞宗国泰寺を中心に日蓮宗長遠寺(知新館)の編者飯田老忠などが、中島組や新町組にも各宗派寺院が所在していました。



**多聞院**  
城下東部の比治山下に位置し、吉祥山照照寺と称する多聞天王院と呼ばれる、本尊は高倉堂が観鳥行きの折にもたらされた後白河法皇作の多聞天と伝え、音戸から吉田へ毛利氏に従って三浦に移り、島氏により現在地に安置されたといわれ、境内には精家墓所があります。

# 広島「七つの川」物語

広島城下町を流れる太田川は、本流と支流を併せ古来「七つの川」と呼ばれ、永らく親しまれてきました。それぞれの河川には舟船が使い、文政8年(1825)に編纂された「芸藩通志」によると、本川・元山川・西堂池川・平田屋流川・京橋川・猿猴川・広川(現天満川)を挙げ、都合七河川をそれに添えています。本川と元山川には各々66橋、西堂池には27橋、平田屋流・京橋川・猿猴川には合計36橋、広瀬川には78橋があり、計207橋が所在していました。平田屋川には1600石の大型船1隻、そのほかは300石より50石ほどの小船が主でした。

河口部には「川口番所」が置かれ、猿猴川を除いて本川・元山川・京橋川・広瀬川・西堂川・平田屋川に「所」がありました。西国街道の渡河地点には、東より猿猴橋・京橋・平田屋橋(清濁)・元山川・福島橋(現本川橋)・天満川が架けられ、橋梁名が河川名ともなっています。平田屋川には中道・福野村、西堂川には西堂橋・福野橋、広瀬(天満川)には横川川、京橋(神田川)には神田橋が架けられていました。本川は蓮上運道・空跡渡・本川渡・神跡渡・元安川には四丁目渡・六丁目渡、京橋には一本木二級渡・明覚院渡・平塚渡(上下二所)がありました。明治から大正にかけて広島城下の掘削も、都心整備により次第に埋められ、西堂川・平田屋川は現在消滅し、七つの流れは西部の浦島川と己斐(山手川)を加え、太田川放水路によりそれらも消滅し、現在では六つの川となりました。中心部の流川や栗原堀も、現在地名に残るのみとなりました。



広島市の街は歴史がいっぱいみんなて楽しんで歩いてみませんか? 詳細として、広島城南大絵図・広島城北大絵図・広島城東大絵図・広島城西大絵図があります。



参考文献

- よみがえる日本の城(広島編) 松田川 千早博明 H11・2019
- 名城を歩く19 広島城 P19研究会 H14・2010
- 歴史散歩 広島城 H14・2010
- 別冊広島城下町めぐり H14・2010
- 広島城の物語(1) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(2) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(3) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(4) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(5) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(6) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(7) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(8) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(9) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(10) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(11) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(12) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(13) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(14) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(15) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(16) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(17) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(18) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(19) 城下町と開闢の歴史 H11・2011
- 広島城の物語(20) 城下町と開闢の歴史 H11・2011

**編集**  
広島城下町案内  
広島市文化財団  
市民文化センター  
〒730-0901  
広島市東区南三丁目1番21  
TEL:083-221-5943 FAX:083-221-5919  
E-mail:city@city.hiroshima.jp

**発行**  
平成24年3月 初版  
平成29年7月 改訂版  
広島市東区役所市民部地域課に印刷  
〒730-0901  
広島市東区南三丁目1番21  
TEL:083-221-5946 FAX:083-221-5919  
E-mail:city@city.hiroshima.jp

## 広島町新開絵図

江戸時代中期頃に描かれたこの絵図からは、各新聞の地誌高が正確に記載され、用水路や前庭や蔵庫などの設置場所が詳細に記載されています。西国街道や出雲石見街道に沿った町屋や街路なども忠実に描かれていますが、広島城や武家屋敷は如何故か空白にされ、神社や寺の位置もありません。

『新編広島市史』巻4(広島市史文庫) 町屋図(1989)

**絵図概要**  
江戸時代中期頃に描かれたこの絵図からは、各新聞の地誌高が正確に記載され、用水路や前庭や蔵庫などの設置場所が詳細に記載されています。西国街道や出雲石見街道に沿った町屋や街路なども忠実に描かれていますが、広島城や武家屋敷は如何故か空白にされ、神社や寺の位置もありません。

**絵図注記**  
寛永9年(1732)に、龍神武左衛門がこの絵図を改正しました。町方歩行の船越徳平と、新聞村通り歩行の好田助左衛門が開闢しました。画の清三郎がこれを着せ、も一度清三郎がこれを著しました。しかし、社殿(神社)や堂殿(寺院)などの形は同じ、彩色は紋別帳に合わせて著しました。享保13年(1728)夏に、明石右衛門が由来を載かにするものです。

# 安芸国神崎八景詩画

日田市富島町史資料館蔵

二景: 江波秋房(江波に秋の帆)  
一景: 西崎春南(西方の田の春用)  
四景: 芭史茶亭(芭史の晴れた雲)  
三景: 流島雲草(流島の一面の青葉)  
六景: 吳竹映翠(安芸小川の秋)  
五景: 平津耕造(草津に映る朝陽)  
七景: 前川群鳴(水に遊ぶ群鳥の群)

江戸幕府5代将軍徳川綱吉の特選であった水戸順庵(1621-1698)が、4代広島藩主浅野綱景の求めに応じて、広島城下の本川筋沿路より、景勝八景を選び、一票ごとに漢詩を詠んだもので、絵圖は仲澤藤左衛門の名筆です。(『新編広島市史』巻7)



